三好徹

暁に帰る

二好 徹
に帰る

文藝春秋

暁に帰る

昭和五十七年五月十五日　第一刷

定価一二〇〇円

著者　三好　徹

発行者　杉村友一

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三ノ二三

印刷所　大日本印刷

製本所　矢嶋製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© Tōru Miyoshi 1982　Printed in Japan

目次

旅立ち……5
再会……35
若者たち……77
愛のかたち……94
新しい道……128
明暗……148
異国にて……183
血と砂……223
夜の亀裂……262

裝丁　濱野彰親

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

暁に帰る

旅立ち

立てこんでいた客が一時的にすうっといなくなって、店のなかがいやに静かになるときがある。残っている一組か二組の客も、そういうときは、はしゃぐのをやめて、にわかに神妙になるものだが、そのとき隅の席にいた二人連れの客はそうではなかった。あいかわらず、あたり構わぬ大声で喋っていた。

といっても、大きな声でまくし立てているのはそのうちの一人で、加奈子が初めて迎えた客だった。紺の背広にエンジ色のゴルフシャツを着ており、きりっと引きしまった顔はスポーツ選手のような印象をあたえるが、蒼白い顔からしてもそういう職業ではなさそうだった。水商売を何年かしていると、客の商売はたいてい見当がつくものだが、その男がどういう仕事をしているのか、加奈子にはまったく見当がつかなかった。ともかくふつうのサラリーマンではなさそうである。

「なア、きみ。そうは思わんか。こういう大問題を扱わんという手はないぞ。きみのところの部長というのは、どうかしているんじゃないのか」

男はまるで叱りつけるように、連れの客にいった。

「うむ」

静かな方の客は、手にしているグラスを飲みもせずに眺めている。声の大きな男は、左手にタバコ、右手にグラスを持って、それを交互に口もとへ運んでいる。

「な、そうだろうが！」

男は再び大きな声でいった。

その席についているホステスが救いを求めるように加奈子の方を見た。加奈子の方は、四人できている社用の客の席についていた。

大声の男の連れは、相良といって、中央日報の学芸部員だった。月に一度くらいの割合いで、小説家とか新聞に評論を書く大学教授などといっしょに現われる。

その相良が大声の客を連れて入ってきたのは、一時間ほど前だった。客は混んでいて、加奈子はちょっと挨拶しただけで、続いて入ってきた客の席についてしまったのだ。そのとき、相良から名前を聞いたはずだが、加奈子は忘れてしまっていた。

「ま、ともかく、もう一度うちの部長に話してみるよ」

と相良が静かにいった。

「よし、帰ってきたら電話するからな。それまでに、そのわからんちんの部長によくいい聞かせておいてくれ」

「わかっている。それより、もうここを出ないと、静岡行

きの最終に乗り遅れるんじゃないか」
といって相良が時計を見た。つられて加奈子も時計を見た。九時半だった。
大きな声の男は、時計を持っていないのか、横にいるホステスにいった。
「いま何時になる？」
そして、答えを聞くと、
「そうか。そんな時間か。それでは行かねばならんな。せっかくこんな美人がいるのに、まったくもったいないことをしたな」
と男はにこりともせずにいった。
「あら、うれしいことをおっしゃるのね。もう少しお飲みになっていらっしたら？」
「そうはいかん。今夜じゅうに静岡に行かねばならんのだ。すぐに勘定してくれ。今夜はおれが払う」
男はいぜんとして大きな声でいった。
相良が男の肩を抑えるようにして、何かいっている。おそらく、ここは自分に任せてくれ、と男を説得しているのであろう。もっとも、相良の場合は、現金で払うわけではなくて、つけになる。
「いや、そうはいかんよ。ここはきみの縄張りかもしれんが、誘ったのはこっちなんだ。おい、いくらだ？」
男は店内をぐるりと見まわし、加奈子に目をとめていった。まるで縄のれんのおでん屋で飲んだような言い方で、銀座のバーの落ち着いた雰囲気を無視していた。
加奈子は、客にことわりをいって席を立ち、相良の席へ行った。払ってもらうのはありがたいが、こんなふうに大きな声で叫ばれてはかなわなかった。それに、この場違いとも思われる客に払ってもらわなくても、相良にあとで請求書を送ってもいいのである。
相良もそのへんは心得ていて、
「ママ、ぼくにつけておいてよ」
と、近寄って行った加奈子に、申訳なさそうにいった。
「かしこまりました。相良さんも、ああおっしゃっておりますから……」
加奈子がなだめるようにいうと、男はきっとなって、
「冗談じゃない。こんな安月給の新聞記者に払わせることなんてできるものか。第一、今夜はおれがこいつを誘って……」
加奈子は、そくざに決心した。これ以上なだめても無駄のように思われたし、男の傍若無人な言い方にも腹が立っていた。
「では、相良さん。そうさせて頂くわ」
加奈子は一応のことわりをいってから、レジをしている令子のところへ行き、伝票を出させた。そして、令子が金額を書いた小さな紙片を男に渡した。スコッチを十杯以上も飲んでおり、ホステスのサービス料をつけ加えると、四万円近い勘定になっていた。

「う？」
男は口のなかで呟き、ポケットに手をつっこんでから札をつかみ出した。ぴったり四枚だった。
加奈子が男から四万円を受取り、
「ただいま、領収証とお釣りをお持ちしますので、しょうしょうお待ちを」
というと、男は怒ったように、
「いや、いらんよ。さ、行こう」
と相良をうながして、立ち上った。
「新関君。本当にいいのか」
相良がいった。加奈子は、それを聞いて、男の名前が新関だったことを思い出した。
「もうすんだことじゃないか。それより、わからんちんの部長にちゃんとわからせてくれよ」
「いつ東京に帰ってくるんだね？」
「ええと、あした講演してから、二、三日のんびり東伊豆の方を回ってくるつもりだったが……ともかく帰ったらすぐに連絡する」
ホステスの一人が、あずかっていた荷物を新関に渡した。小さな旅行鞄だった。
「あら、重いわァ」
と、ホステスがいった。本当に重そうであった。
「うむ、重いんだ」
「何が入っているのかしら？」
「札束がぎっしり入っている……というのは嘘だ。本だよ。本が入っている」
新関はいやにまじめな口調でいい、相良と連れ立って外へ出た。
女たちの声に送られて、二人の男は駅の方へ歩き出した。
「大丈夫か」
と相良がいって時計を見た。
「うむ」
新関はうなずいた。
「じゃ、ぼくは地下鉄で帰るからここで」
そういう相良に、新関良平は片手をあげ、
「うむ。じゃ、な」
といって別れを告げ、有楽町の駅へ向って進んで行ったが、すぐに足をとめた。ちょうど信号が赤になっていたせいもあった。
新関はポケットをさぐってタバコを出した。一本だけ残っていた。彼はそれを口にくわえ、さらにポケットをさぐった。百円ライターをさがす、というよりも、ポケットのなかに、金がいくら残っているかを確かめたかったのである。
千円札が二、三枚は残っているはずだった。しかし、考えてみると、相良をたずねるときにタクシーに乗ってしまい、札は、一万円札が四枚だけになっていたのだ。
それを払ってしまったのである。したがって残っている

金は一握りの硬貨だけということになる。
「こいつは参ったな」
新関は声に出していった。
まわりの通行人が彼の方を見たとき、信号は青に変った。新関は動かずに、さぐりあてたライターで火をつけた。静岡行きの切符は買ってなかった。買っておけばよかった、と思った。
それにしても、銀座のバーの勘定は高すぎる。いくらスコッチ・ウイスキーだからといっても、二人で四万円とはベラボウな金額ではないか。それに席についた女たちだって、新関と相良の話を黙って聞いていただけで何もしなかった。それでもきっと、サービス料とかをフンだくったに違いない。
「まったくふざけた話だ」
と新関は声を出していった。
まわりの人たちが、何事かというふうに、彼の方を見た。新関は自分がひとりごとを口に出したことに気がついて、さすがに面映ゆかった。ひとりごとは、新関の癖であった。独身生活が長く続くうちに自然に身についてしまったのである。
世田谷に借りているアパートで休みの日などに掃除をすることもあるが、そんなときでも、
「さて、少し片付けるか」
といったりするのだ。

ただ、そういう場合は、相槌をうつものがいないので、本人もひとりごとを意識しないだけのことだった。
新関はもう一度ポケットの中の金額を調べてみた。百円、十円の硬貨を合わせて、きっちり七百円だった。彼はそれをポケットに戻すと、いやに決然たる足どりで有楽町駅まで歩き、窓口の駅員に、
「静岡まで新幹線でいくらかね？」
と聞いた。駅員は壁の時計にちらっと目を走らせてから、
「まだ最終の二十二時四分がありますね。特急券、乗車券とも三千七百円ですが、お急ぎになった方がよろしいですよ」
「三千七百円か。それじゃ、新幹線を使わないで、在来線の列車はどうかね？」
「夜行の銀河がありますし、各駅停車の大垣行きもあります」
「銀河というのは、急行かね？」
「そうです」
「すると、急行券が必要なわけだな」
当然だというように駅員はうなずいた。
「それなら、その各駅停車は何時に出る？」
「二十三時二十八分発で、静岡到着は午前二時二十九分ですね」
駅員は新関の気持を読んで、先回りして答えた。
「それで乗車券はいくらだね？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「二千円です」
「そうか。二千円か、しまったことをしたな」
と新関は呟いた。あのベラボウなバーで釣り銭をもらっておけば、ポケットの硬貨と合わせて二千円にはなっているはずだった。午前二時半でも、今夜じゅうに静岡へは行けたのだ。
「参考のために聞くけれど、七百円で、どこまで行けるかね？」
「大磯」
駅員は少しぶっきらぼうにいった。
大磯までしか行けないのでは、どうにもならない、と新関は思った。
駅員とやりとりしているうちに、十時近くなっていた。世田谷のアパートに戻って、机の中や別の洋服のポケットをひっくりかえしてみれば、二千円くらいの金は出てきそうである。しかし、電車を乗りついだのでは、大垣行きの発車時刻までに、戻ってこられるかどうか疑問だった。
「どうもありがとう」
新関は礼をいって窓口をはなれた。
依頼された講演は、朝十時からだった。あすの朝に行っても、間に合うことは間に合うのである。アパートに戻って、今夜宿泊することになっていた旅館へは、電話をかければいいのである。
待てよ、あの旅館は何といったかな、と新関は思い出そうとした。新関に講演を依頼してきたのは、学生時代からの友人である桑村で、桑村は、むかしの武家屋敷を旅館にしたところだ、といっていた。新関は、それは結構だと答えて、旅館の名前もたしかメモ用紙に書きつけた。そのメモ用紙をどうしたか、である。
新関はポケットをすべてさぐってみたが、メモ用紙は出てこなかった。もしかすると、メモしたまま電話のそばに置き忘れてきたのかもしれなかった。
「どうもいかん！」
彼は自分を叱りつけた。こうなると、あすの朝、出なおすしかなさそうに思われる。しかし、出なおすのはいかにもくやしかった。旅仕度をととのえて出てきたのである。銀座のバーで高い酒を飲んだだけで、すごすごと引返す結果になるのは、間が抜けているとしかいいようがなかった。
よろしい、どうしても今夜じゅうに行ってやる、と新関は決心した。
「金はないが、知恵ならいくらでもある」
というのが、新関のしばしば口にする冗談だった。もっとも、彼は冗談のつもりでいうのだが、ひどくまじめな顔でいうために、聞く人によっては、思い上りの言葉という印象をうけることもあるらしい。
いずれにしても、このおれが金のないくらいのことで、へこたれてたまるものか、と新関は自分にいい聞かせた。

それに、持合せがないといったって、あすになれば、講演料の十五万円が入ってくるのである。
新関はにんまりした。それみろ、知恵はいくらでもあるじゃないか、と思った。
彼は駅の構内を出ると、通りのわきに立って、走ってきたタクシーをとめた。
「静岡まで行ってくれ」
「静岡は……ちょっとねえ。すみません。ほかの車をさがして下さい」
運転手は、そういってドアをしめ、走り去って行った。
新関は、次のタクシーにも拒否され、ようやく三台目の個人タクシーに乗ることができた。中老の運転手は、走り出してから、
「帰りの東名の高速料金を出していただけますか」
と遠慮がちにいった。
「いいとも。出すがね、どれくらいかな？」
「さァ、わかりませんが、二千円か、もしかすると三千円くらいかもしれません」
「二千円でも三千円でもかまわんのだが、料金を請求するとき、いっしょに請求してくれたまえ」
「請求といいますと、お客さん、クーポンですか」
「クーポンじゃない」
「現金で支払っていただけるのでしたら、請求するも何も……」
関係ないではないか、と運転手はいいたげだった。
「運転手さん、むろん現金で支払うのだが、じつをいうと、いまは文無しなんだ。いや、正確には七百円ほど持っているがね、まァ文無しといっていいだろうな。しかし、心配することはないよ。着いた先でちゃんと立てかえてくれるはずだ」
と新関はいった。旅館には、あした手に入る講演料から払えばいいのである。講演の主催者に、東京からのタクシー代を押しつけるわけにはいかないが、旅館代は、先方で負担することになっていた。旅館も立てかえるくらいのことは、してくれるはずだった。
「はず……ですか」
と運転手は不安そうにいった。
もし着いた先が、立てかえるのを拒否したらどうなるだろう、と考えたらしかった。
「運転手さん、大丈夫だよ。相手は有名な旅館なんだから」
「はあ」
そうだ、何という旅館だったかな、静岡に着くまでに、思い出さんといかんぞ、と新関は思った。
「ともかく安心して行ってくれたまえ」
「それじゃ、途中でガスを補給して行きますから」
「静岡までどれくらいかかるかね？」
「さァ、どれくらいですかね、見当としては、四万円から

五万円でしょうか」
「いや、料金ではなくて時間のことだよ」
「この時間ですと、二時間くらいで行けると思いますが……」
「では、静岡の市内に入ったら、起こして下さい。ちょっと眠るから」
新関はそういって目をとじた。これで問題はすべて解決である。あとは、旅館の名前を思い出すだけでいい。
しかし、思い出そうとしているうちに、新関は本当に眠ってしまった。安心したせいと酒の酔いがまわってきたらしい。
ふと気がつくと、車は止っていた。だが、窓の外は町なかではなかった。
新関はからだを起こして周囲を眺めた。まだ高速道路の上であった。
「運転手さん、どうしたんだ？」
「あの女の方が……」
見ると、路肩に止めた車のわきに、一人の女が立っており、肩まであげた右手を下ろしかけていた。髪が風に煽られている。
新関は窓をあけて声をかけた。
「どうしたんです？」
「恐れ入ります。じつは車が故障いたしまして、立ち往生いたしておりますの」
と女は、落ち着いた調子でいった。バルキーふうのセーターにパンタロンという服装だが、口のきき方からすると、三十歳前後という印象だった。
「運転手さん、ぼくは車は弱いんだ。ちょっと調べてあげたらどうだろう？」
運転手はうなずいて、車を出て行った。新関が見ていると、前のボンネットをあけ、自分の懐中電灯を照らして、あちこちいじっている。女はその横で、背筋をすっと伸ばした姿勢で見下ろしている。自分の車の故障なのに、まるで他人事のような感じである。
車は外車だった。新関にも、それぐらいはわかる。流線型のスポーツタイプで、ベージュ色の車体だった。
運転手は二度ほど運転席に坐り、何かしていたが、最後に首を振った。どうやら、自分の手に負えないといっているらしい。そして手を新関の方へあげて、何か説明した。
女が彼の方を見た。照明をまっこうから浴びたその顔は、白く光ってみえた。
運転手が車の方へ戻ってきていった。
「お客さん、あの女性を静岡までいっしょに乗せてあげていただけますか。あの車は、修理屋がこないことには、どうにもならんですよ」
「いいけれど、ここはどこのあたりだね？」
「沼津インターを通りこしたばかりのところです。くもっているので見えませんが、本当は右手に富士山があって、

とてもいい景色なんですがね」
「景色はどうでもいいさ。ぼくは構わないから、どうぞ、といってくれないか」
運転手が再び女のところへ行った。女はトランクをあけて小さなスーツケースを持ち、車に鍵をかけてから新関の車に近寄ってきた。そして、立ったまま、
「勝手なことをお願いして申訳ございません」
「ちょうどよかったんですよ、この方も静岡へ行くところだったんですから」
と運転手がいった。
新関は苦笑した。どっちが本当の客だか、わからんじゃないか、と思ったが、からだをずらしていった。
「さア、どうぞ」
「恐れ入ります」
女が坐って窓をしめた。ふわっと香水の匂いが新関の鼻孔をかるく刺激した。
新関は、香水について、とくにくわしいというわけではない。むしろ、ほとんど知らないといった方がいいのだが、横にいる女のつけている香水がフランス製の高価な銘柄のものであることを悟った。デパートあたりで買うと、四分の一オンスの小びんで、二万円はする品である。独特の形をした黒い容器に入っている。
「ジョイですな」
新関はいつもの癖で、つい声に出していった。女は、聞きとれなかったのか、
「何でしょうか」
と彼の方を向いていった。
「あなたの香水ですよ。ジョイでしょう？」
「あら」
女は新関をちらっと見て、
「ごめんなさい。これ、おきらいだったでしょうか」
「べつにきらいということはありません」
「おくわしいんですね」
と女がいったが、新関は答えずに、
「どちらまでいらっしゃる予定だったんです？」
「わたくしですか」
と女は呟いてから、不意に投げやりな口調になって、
「どこといって、決めてはいなかったのです。とりあえず名古屋あたりまで行ってから、どこかホテルを見つける気でおりましたの。あるいは眠くならなければ、京都あたりまで行ったかも知れません。どこでもよかったんです」
「いいですな。気ままな旅は」
「よくはありませんわ」
「そんなことはない。結構なご身分じゃないですか。あなたに比べれば、ぼくなぞは、義務として静岡まで行かねばならない。そういう気ままな旅を楽しんでみたいものですよ」
「静岡へは何をしにいらっしゃいますの？」

「講演です」
その言葉を、女はとりちがえた。
「コンサートをなさいますの？」
「いや、その公演ではなくて、喋る方の講演に行くんです」
そのとき運転手が、
「お客さん、もうすぐ静岡ですが、何という旅館ですか」
運転手に旅館名を質問されて、新関は、しまったと思った。いぜんとして何という旅館だったか、思い出せないままだった。
「ええと、旅館はだね……待ってくれよ。その旅館は、たしか駅の近くにあるはずなんだが、ま、それよりこちらさんを先にお送りしよう。そのあとで、旅館を紹介してくれたやつのところへ電話をするからね」
「わたくしは、どこか車を拾えるところで下ろしていただければ結構ですから」
「こちらにお知合いでもいらっしゃるんですか」
「そうではありませんが、結婚する前に何度か泊ったことのある旅館があるので、そこへ参りますから」
そうか、人妻だったのか、と新関は思った。落ち着いたものごしからいっても、既婚者であることは当然といっていいが、にもかかわらず、新関はかすかな失望感を味わった。そして、そのような感情の生れたことが、われながら不可解というしかなかった。
「ついでということもありますから、その旅館までお送りします。道順はわかりますか」
「それでは、お言葉にあまえて送っていただきますわ」
女は、運転手に、高速道路を出てからの道順を指示した。
間もなく車は市街に入り、いったん駅前に出てから、わき道に入った。
「そこで止めて下さい」
女は運転手に指示してから、新関の方を向いて丁重に頭を下げた。
「どうもありがとうございました。おかげで本当に助かりました」
「いや、お礼をいわれるほどのことじゃありませんが……」
新関は窓の外を見た。そして、旅館の名前を見て、あっと思った。世話をしてくれた桑村から聞いた名前がそこにあったのだ。
「おい、運転手さん、ここだったよ。この旅館だった、いま思い出した」
「へえ、そうですか。そりゃよかったですな」
と運転手はいった。もしかすると、彼の言葉を信じていなくて、美人の泊るところにいっしょに泊るつもりになったのだ、と解釈したのかもしれなかった。
「ええッと、料金はこのメーターの金額のほかに、往復の高速料金をプラスしていただく約束ですから……」
「わかっている、いっしょにきてくれ」

新関は旅行鞄を手にして車を下りた。
女はびっくりした様子だったが、何もいわなかった。新関は弁解する必要を感じた。
「偶然ですがね、ぼくもここに泊ることになっているんです。ただ名前を忘れていて、困っていたところなんですよ」
「それはそれは」
女は新関をからかうようにいってから、門の中へ入って行った。彼女も新関の弁解を信じていないのかもしれなかった。
旅館は和風の造りだったが、玄関の内部はホテル式のフロントになっていた。新関が、少し遅れて運転手といっしょに入って行ったときには、部屋係に先導されて、奥の方へ進みかけていた女は新関にかるく会釈した。口はきかなかった。
新関はフロント係に、桑村の名を出し、
「じつは新幹線でくるはずだったが、乗り遅れてしまってね、東京からタクシーできたんだ。新関良平というのだが……」
「承っております。それはどうも大変でございました」
「大変というほどのことはないんだが、じつは、この運転手さんに払うタクシー代をあしたまで立てかえてくれませんか。おい、運転手さん、いくらになる?」
と新関は振り向いていった。
運転手の告げる金額を聞いて、係員はびっくりしていた。駅から旅館までの車代を立てかえさせる客は珍しくないとしても、東京から車で乗りつける客は、さすがにいない様子だった。新関は、旅館の宿泊代は桑村の負担だが、この立てかえ分は、あした自分が清算する、といった。
係員は、なぜこの場で支払うことをしないのか、不審に思ったようだったが、桑村の紹介を信用したとみえ、いったん奥に消えてから金を持ってきて、運転手に渡した。
タクシー代は、講演料のほぼ三分の一だった。銀座のバーで相良といっしょに飲んだ額と合わせると、新関は、十万円近い金を費消したことになる。考えてみれば、その金は無駄に使ってしまったものであった。人によっては、バカなことをしたというだろうし、あるいは、もったいないと思う人もいるだろう。
しかし、新関はそうは思いたくなかった。相良にバーの勘定を払わせるわけにはいかなかったし、車代にしても、運転手のかせぎにはなっているのだ。また、そのために美しい女と深夜のドライブをしたではないか。
ただ、女が人妻だったことは、新関としては、おもしろくなかった。どうしておもしろくないのか、といわれると困るが、ともかくおもしろくないことだった。
いずれにしても、すべて終ってしまったことである。新関は、部屋に案内されると、浴衣に着かえ、そのままふとんに入ってしまった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com